釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和６年（2024年）２月13日発行　VOL 46

生徒に任せるために

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

放課後、職員室で仕事をしていると、１階から軽快な音楽が聞こえてきます。気になって階段を下りていくと、理科室の前の廊下で陸上競技部の生徒たちが音楽をかけながら、いろいろなステップを踏んで走力を高める練習を繰り返しています。顧問の松田教諭、中村教諭は生徒たちを見守っていて、指示を出したり、指導をしたりしてません。生徒たちは自分たちで練習を組み立て、何か気付いたことがあれば互いに声を掛けていました。「生徒たちは任されている」、そんな印象を受けました。

ここからは想像でしかありませんが、生徒たちがこのような姿勢で練習に臨めるようになるには、これまで様々な試行錯誤があったと思います。そして、それを繰り返しながら少しずつ自分たちで練習するスタイルを確立していったのだと思います。その過程で、松田教諭、中村教諭は、生徒たちから発せられる問い掛けや思い、考え、悩み、願いなどを丁寧に聞き取り、大切にしていたのではないでしょうか。最初、生徒たちの言葉はつぶやき程度だったかもしれません。うまく言えないこともあったと思います。教師として生徒の言葉に耳を傾け、丁寧に受け止めてくれたからこそ、生徒たちは安心して声を出すことができるようになったのではないでしょうか。

「生徒にはできないと思い込み、任せることができない。教師が小さなことまで周到に準備して取り組む。ただ、多様な生徒がいる中で、一人一人に確実な力を付けることは難しい」ここに教師としてのジレンマが生まれますが、仕方がないと考えてしまいます。

しかし、任せてみると、実際には生徒が自分で考え、必要なときに他の生徒と話し合ったり、相談し合ったりり、教え合ったりし、それぞれの学びが確かなものになり、深まっていくことに気付くことがあります。

生徒の意見を聞くと、何でも好き勝手なことを言い出すのではないか、自分勝手な生徒になってしまうのではないか、と私たち教師は考えてしまいます。そんなときは、生徒と対話を重ね、その生徒自身が気付けるようにしていくのが教師の仕事だと思います。生徒の対話の積み重ねは、その生徒の思考を深めていくのだと思います。生徒が声を出す（自分の考えを伝える）ことは、未来社会を生き抜く力を培うことにつながっていきます。

本校の各教室、職員室は、声を出せる（自分の考えを伝える）場になっているでしょうか。その声を受け止めることができる環境になっているでしょうか。

独立行政法人教職員支援機構理事長の荒瀬克己氏は、「子どもが学び、学び合う場を、教職員が学び、学び合ってつくっていく。一人一人の子どもを『自立した学習者』に育てるためには、教職員それぞれが『自立した学習者』でなければならない」と述べています。

私たち大人は、生徒の姿から学ぶ必要があるのではないでしょうか。そして、生徒の声を聞くことは、大人にとって大切な学びにつながっていくのだと思います。